

個を生かす集団・集団を生かす個

星野欣生（南山短期大学教授）

裁判所の正面玄関にいたる、広い長い階段のちょうど中段あたり、先に階段をおりてきた壮年の建築技師（陪審員）に、あとから来た老人（陪審員）が呼びかける。

老人 「あのお、お名前は？」

建築技師「デーヴィス」

老人 「わしはマカードルです。じゃ、さようなら」

建築技師「さようなら」

二人は握手して別れ、階段をおりていく。さきほどまで降っていた雨はあがっている。そのあとを、初老のサービス業者（陪審員）が、ぬれた階段を、ゆっくりおりていく。カメラはその姿を遠ざかりながらとらえて、それに重ねるように、THE ENDのマークがでる。

これは、アメリカ映画【12人の怒れる男】（12 ANGRY MEN）（シドニー・ルメット監督、ヘンリー・フォンダ主演、1957年制作）のラストシーンである。数ある映画のなかでも、有数の印象的なラストシーンではないだろうか。

このラストの直前のシーンでは、

最後までひとり、少年の有罪を主張して、建築技師と対決していた、初老のサービス業者が

「（自分の一人息子の写真を見ながら）このロクでなしめ、一生、苦労するぞ。（息子の写真を破る、すすり泣きながら）無罪だ。——無罪だ。」

と腹の底からしぼりだすような声で叫び、坐って顔を伏せる。なおも泣きつづけている。すべてが終わって陪審員たちは、無言で立ち上がり、部屋から出ていく。ひとり、机にうつぶせになっているサービス業者に、建築技師が、ハンガーから彼の上衣をはずしてもって行ってやり、肩にかけてやる。

といった場面がある。互いに無言であり、顔も向き合っていないが、それまでの対決は嘘のようであり、深いつながりがそこに生まれているようにすら感じられる。

この映画は、ご存知の方も多いと思うが、父親に対する殺人容疑で、裁判をうけているひとりの少年の有罪か無罪かを定める（有罪となれば死刑）陪審員の決定過程をとりあげたドラマである。少年の有罪は決定的と思われ、早く有罪の決定をして帰ろうとする陪審員たち（12人）のなかの一人が、予想に反して、無罪の投票をするところからこの人間ドラマが始まる。（ちなみに、有罪か無罪かを定める陪審員の決定は全員一致を要求されている。）いらだつ雰囲気なかで、11対1の討論が始まる。ひとり無罪に投票した建築技師が、少年が無罪である確信はないとしながらも、ひとりの人の死にかかわる問題であるとして、全体に討議を求めていく。有罪の根拠が、いかに偏見と先入観にみちているかを具体的に説きあかし、メンバーの共感を少しずつ得ていく。いきづまるような激論、感情のぶつかりあいのなかで、投票を繰り返しながら、最終的には、全員が無罪の合意に達する。しかも、この人たちは、ラストシーンで始めて二人が名乗りあっているように、互いに名も知らない正しく見知らぬ人たちである。人間の出会いのドラマがそこにある。

私が、このレポートの冒頭に、【12人の怒れる男】をとりあげたのは、この作品が、“個と集団”の問題を実に鋭く語っているからである。

12人の見知らぬ男たちが、たまたま、陪審員に選ばれたということで、ひとつの集団をつくり、ひとつのテーマを追求していく。普通ならば、大方の予想どおり、難なく少年の有罪が決定したと思われるし、仮に一人の異議があったとしても、その人も集団の大勢に従うことになったと思われる。この映画でも、建築技師がひとり無罪に投票したときの彼への集団の圧力は相当なものであり、彼も、最初の討議の後、もし2回目の投票でも、11対1ならば有罪で終わろうと提案しているくらいである。しかし、彼が、証拠品のナイフについての疑問（少年のみが持っていて、他に類似品がないと思い込んでいたのに、彼が類似品を少年の家の近くの質店で見つけてきた）をなげかけたり、少年がスラム出身であることに対する偏見が表にでたり、何にもまして、彼の、事件や少年への真摯な態度に共感を誘われた、老人（陪審員のひとり）が有罪を撤回したことで、討議が続けられることになる。

どのような集団においても、集団を構成している個人に集団の圧力がかかってくることは自然であるが、多くの場合、個人はその圧力に屈してしまいやすい。特に、集団の形成初期に、少数者に圧力がかかってくる場合は、尚更である。集団の中で個が確立していないからと言ってよいだろう。

映画は、少年の家の階下に住んでいた老人の法廷での証言（少年の「殺してやる」という声が聞こえた）をめぐっての議論。そこでは論理的に話しがすすめられるが、建築技師や老人の、相手の発言をよく確かめ正確に反応していく態度は、他のメンバーの言動に影響を与えることとなり、反対意見であっても、十分に聴き、反応し、確かめあっていこうという規範が集団のなかに出来てくる。寡黙であった人も、すこしずつ主張し始めるなかで、疑問となることが多く表面化してくる。そして、それまでお互いに無関心で、たまたまここに居合わせているといった感じの人たちが相互に相手の言葉に、また、その人に強い関心を示すようになってくる。少しずつ集団が成長していっていると言ってよいだろう。J. ギブのグループ成長に関する仮説にしたがえば、集団の中に防衛機制を減少していく風土が醸し出され、それとともに、メンバーのひとりひとりが、個として、自由に発言し行動するようになってくる状態である。ここでは、メンバーは、集団の圧力は感じながらも、決してそれに流されることなく、個を守っている。

この後、映画は、さらにメンバー相互の激しいやりとりを繰り返しながら、終局に向かっていく。ここでは、感情と論理の二種のコミュニケーションが交錯しつつ、また、尊敬と敵視、受容と拒否のなかで、個と個がぶつかりあっていく。葛藤を繰り返すなかで、集団が一つにかたまっていく、成長していく過程が見事に展開されている。集団の成長はその構成員であるメンバーひとりひもりに影響を与え、いまここでの関係を深めていく。そして、相互信頼に基づく関係が自ずとつくられてくる。結果はメンバー全員に満足をもたらすものとなっている。集団と個のあるべき状態がそこに示されていると考えられる。

私たち日本人にとって、集団は避けて通ることの出来ないものである。幼少時より、集団の中で生活することを余儀無くされ、集団を無視することは、生活そのものが脅かされることにもなりかねない。いつも、集団の圧力を気にしながら生活している。長いものにまかれる式に、集団の流れていく方向に棹さすような行動はなかなかとれない。自ずと、集団にうまく適応していく術を身につけているものである。言い換えれば、集団の中で、個をだしてはいけない、個を殺す術を身につけてしまっている。それ故に、ひとつのかたまりとして、大きな力を発揮することは得意でもある。ある意味で、集団体制が今日の日本をつくりあげたとも言えよう。その前には集団主義体制が世界に戦争の惨禍を

撒き散らしたことを忘れることが出来ない。その結果が個を尊重する民主主義体制を産み出したのであるが、戦後40年の日本の歴史をかえりみした場合、いつのまにか、集団の蔭に個が隠されてしまったと言え言過ぎであろうか。自己の利益のみを追いかける個は、ばっこしているが、個を尊重する傾向は、後退していると言えるのではないか。家族のなかで、仲間との関係で、近隣社会で、学校で、職場で……極論すれば、集団優先の時代が復活しつつあるように思えるのは筆者のみであろうか。

欧米の社会は、個人主義の社会といわれる。日本人とは逆に、幼少時より、個の自立がメインテーマである。個優先の社会である。アメリカ合衆国滞在中の私の経験でも、ひとりひとりの主張は次から次へと絶え間なく出てくるが、グループとしてまとめることは容易ではなかったのを覚えている。日本人のように、人が数人集まって、目標が与えられれば、難なくグループ活動が出来るのとは雲泥の差である(成長した集団とは程遠いのであるが)。個の存在が、あまりにも強いが故に出てくる当然の現象であろう。両者が統合されればと、しばしば思ったものである。

個と集団、それは相容れない要素を抱えたものであるが、それぞれが独立してあり得るものではない。集団とは関係のない個、孤独な個は一見有り得るようにも思えるが、一人の人間としてこの世界に生きている以上、集団と無関係であることは考えられない。反対に、集団は個の集まりであるが故に、個と関係のない集団があり得ないことは明白である。当たり前のことであるが、共存し得る存在としての個と集団のありようを考えてみたい。

個が個であるためには、他者の存在を抜きにしては考えられない。他者との関係において、始めて、個が存在しうる(関係的存在としての個)。他者の集まりが集団であり、私たちの社会生活において、集団とのかわりを否定することが出来ないのは言うまでもないことである。ここでは、他者関係はよこに置いて、集団との関係のみを考える。前述した【12人の怒れる男】において、私は、集団の成長を見たのであるが、そこでは、ひとりひとりの存在が明白であり、つまり、集団のなかに個が埋没することなく、それでいて、集団としても確立している。単なる人の集まりではなく、また、特定のメンバーの間でなく、全メンバーの間に、心のふれあう関係が生まれている。そこにあるのは、“自立した個”の集まりとしての集団である。集団の中において、しかも自立した個が集まった時、集団が、“ほんとうの集団”になったとすることができる。そして、個の自立と集団の成長は深い相関関係にある。集団が成長するためには、個の自立が必須であるし、個が集団の中で自立するためには、集団の成長が必要条件である。両者が関係しながら、共に成長していくものである。このことは、先の映画において、相互に無関心であった人たちが、コミュニケー

ジョンを重ねていくうちに、集団が単なる人の集まりから、目的（与えられたものでなく、自分たちのものとして）を持った、しかも、成長していく集団、自己変革していく集団として機能してきたとき、メンバーは相互に関心を持ちはじめ、自分で気づかなかった自己のいろいろな側面に気づきはじめ、自己を開放して、相互に関心を深め、深いかわりあいをもつように成長していったと言うことが出来る。そのためには、メンバーそれぞれが自己主張できると共に、相手があるがままに受容できることが必要である。また、集団の側から言えば、防衛機制の少ない、開放的な風土をつくりだしていかなばならないことになる。それをづくりだすのは、またメンバーの行動であるが。いわば、にわとりが先か卵が先かの関係である。個と集団がほんとうに共存したとき、個と集団は、ともに成長していくことになる。“個を生かす集団”，“集団を生かす個”，この言葉がすべてを語っていると言えよう。

現代は関係希薄の時代と言われる。“人と人”との関係があたかも，“モノとモノ”あるいは“人とモノ”のような関係になっている。家庭で、教育現場で、職場で、そして、社会で人がモノあつかいされている場面はあまりにも多い。個の尊重、個性化と言われながら、個はモノあつかいされ、個性喪失の時代を迎えつつあるように思える。個性化という名の集団化が方々で起こっている。皆が同じ行動をする。はみだすことはタブーである。その光景は、教育現場においても、ファッションにおいてもなど、いろんな所で目にすることができる。この傾向はますます強くなっていくと思われるが、片方で、未来的には、関係変動の時代がやってくるように思える。関係が、一層、多様化し、複雑化していく。人と人との関係ばかりでなく、人ともとの関係にも真剣に取り組むことが必要になってくるだろう。個の喪失は、集団優先の考え方につながっていく恐れがある。集団主義から個が消されたとき、それは、全体主義につながっていくだろう。個が確立した集団、それは、極めて現代的な課題である。

